

反抗としてのランニング ——アラン・シリトー『長距離走者の孤独』について¹

高橋 大樹

国際コミュニケーション学科

1.

2010年4月25日付 The Guardian 紙の web 版にあるアラン・シリトー (Alan Sillitoe) の訃報記事を読むと、彼が1960年代、ソビエト連邦から西側諸国に暮らす抑圧された労働者階級の唯一の代表として考えられていたという記述 (During the 1960s, the Soviet Union feted Sillitoe as the only genuine spokesman for the oppressed working classes of the west) を見つけることができる。² 彼の作品の多くは労働者階級に焦点を当てて描かれているが、これまで文学批評的な関心を集めてきたとはいえないだろう。皮肉にも彼の特徴であるその左翼的な政治姿勢ゆえに敬遠されてきたとも考えることができる。本論でも、シリトーの政治姿勢にのみ焦点を当てるのではなく、初期の短編集『長距離走者の孤独 (The Loneliness of the Long-Distance Runner)』(1959) 中の表題作を取り上げ、「走る」という行為を通じての身体性の問題とその孤独感の原因を探る。労働者階級の青年コリン・スミスは盗みを働いたせいで、感化院 (Borstal、以後ボーストルと表記) に入れられ、その代表としてクロスカントリー大会に出場することになる。その過去の様子を振り返りながら過去時制で書き記すという形で作品は進行してゆく。ランニングはボーストルでの更生の一種としての性質をもっているが、スミスにとって走る行為は苦痛というよりはむしろ自由をもたらす行為である。この「走る」という身体的動作が彼にとっての一種の自己認識への契機となっているにも関わらず、彼はその「走る」ことを止め、体制への非服従を完成させることにより、自らの存在の意味をも確認するというある意味矛盾した行動をとる。階級というキーワードとセットで紹介されることの多いシリトーの

作品だが、本論では「走る」という身体的動作がそれを行う主人公スミスにどのような意味を与え、さらに物語のタイトルにある彼の孤独感とは一体どのような種類のものであったのかを検討していきたい。

2.

具体的に作品を検討する前にぜひ注目しておかなければならないキーワードがある。それは作中でスミスによって二度言及されるティディボーイズである。ティディボーイズとはロンドンが中心となった若者文化現象、とくに労働者階級少年たちが中心となった現象のことで、メディアは不良暴力少年のイメージで書き立てることが非常に多く、その理由としてはこの小説が出版されるちょうど一年前のある事件がきっかけとなっている。当時シリトーが生まれ育ったノッティンガムでティディボーイズが非白人住民に対する襲撃、いわゆる「黒人狩り (nigger hunting)」を行っていた。1958年8月23日夜10時ころパブでのささいな口論から非白人の青年が白人を刺殺する事件が起き、これをきっかけにしてイギリス全土に大暴動が広がってゆく。その事件の約1時間後には報道でノッティンガムの事件を知ったロンドンにいるティディボーイズたちがそれぞれ武器を手にして、ノッティングヒルに集結する。少年たちは、当時の右翼のスローガン、「イギリスの有色化を許すな！」や「黒人はジャングルへ帰れ！」、そして「黒人にリンチを！」などと叫びながら、この地区の西インド系住民の家々に石、レンガ、火炎瓶などを投げつけ、路上の非白人を無差別に襲撃した。ティディボーイズによる「黒人狩り」は1週間以上にもおよび、9月に入るころには数千人にも膨れ上がったと言われている。彼等は「キープ・ブリテン・ホワイト」と叫びながら暴動を引き起こし、5人の西インド

系住民を殺害した。³ そういった残酷な側面もある一方で、彼らがこだわっていたのは喧嘩用のナイフというよりは櫛、すなわち洋服と髪型だったとも言われており、一種の若者たちの流行として考えることができよう。1955年10月アメリカ映画『暴力教室 (Blackboard Jungle)』がイギリスで公開され、ティディボーイズに大きな影響を与えたと言われている。⁴ スミスの語りの中にも映画を意味する *cinema* や *picture* といった単語が何度も使われていることから、スミスがティディボーイズの一員とは言えなくとも、少なからず同時代の影響下にあったことの証左となるだろう。同時代的なモメントを内包するスミスの性格はボーストルへと入所するきっかけになったパン屋強盗のあとで、その奪った金の使い方を考える場面からもうかがうことができる。

俺らは自分らがどんなに金を持っているかなんて人に知らせることは絶対にしなかった。6か月前に工場の事務所をやった仲間の一人みたいに、街へ出て帰りにはおろし立てのティディボースーツを着てスキップドラムのセットを持って帰ってくるなんてことも絶対に。(30)

流行に敏感なスミスが言及するティディボーイたちのスキップルとは1960年代にイギリスで若者たちに流行した音楽ジャンルであり、アメリカ的なジャズとブルースとフォークミュージックが混ざり合ってきたイギリス独自のものであると考えられている。このティディボーイとスキップルというキーワードからわかるのは、スミスが当時の流行に敏感であるだけでなく、流行に敏感でありながらも、その中心とは距離をとるスミスの姿勢であろう。そのようなスミスの姿勢を理解するにはシリトーのある文章が役に立つ。それは彼が1972年に書いた「スポーツとナショナリズム ("Sport and Nationalism")」というスピーチ用原稿である。この文章ではオリンピックそのものに対してかなり批判的な視線が向けられているものだが、個人と国家、あるいは個人と全体の問題に関してシリトーは次のように考える。

ひとりの人間が、肉体あるいは精神において、

現実の場所で、あるいはテレビやラジオや新聞の媒体を通して代償的に参加すると、たちまち彼は個別性を喪失し、理性では割り切れない熱望を心にいだいて国家の一部となってしまう。

ぼくたちはみな、全体主義国家では、スポーツは全体主義体制に個人を訓練し従属させるために利用されていることを知っている。いわゆる民主国家でも、競争的スポーツは同じ目的で同じように利用されるが、そこでは参加者は、第一義的には参加者自身のために競争しているのであって、国家のためでないと思われる。だが彼らはスタジアムや競技場に入場すると、たちまち全体主義体制の人々とまったく同じように、その国の代表になってしまう。……

それはほんとうの文明人ならば、本能的に忌み嫌い、理性をもって抗議するにちがいないものである。ぼくたちはなんとかして——群衆が歓声を上げているときでさえも——ぼくたちの健全な声が聞こえるようにしなければならない。(122-3、強調は筆者による)

このシリトーの言葉が作品に反映されていると疑わずに考えるならば、作品中のボーストルを全体主義国家の象徴として読むことは当然可能である。ボーストルの持つパブリックスクールの性格はすでに指摘されており、伝統的な懲罰理念にパブリックスクールの精神を融合させたものであると言われている。スミスが物語の冒頭で述べるように、素行優秀であれば収監の期間は短縮され、さらに決められた肉体的運動、教育、そして自立のための実業訓練を受刑者たちは受けることになっている。体制への服従と自立心を同時に養成 (*train / cultivate*) することを、道徳的・知的な集団活動を通して、目標としていたというのはブリッグスが『社会と犯罪』の中ですでに指摘した通りである。⁵ 訓練を通じ、服従した社会に適合した人間へと作り変えられる。実際にスミス自身もボーストルと軍の違いはない (12) と述べるし、シリトーの言葉を借りれば、不適切な個人を社会へと従属させる装置として強調されたボーストルがこの物語には描かれている。

3.

スミスはパン屋での盗みのせいでボーストルに入所し、その代表としてクロスカントリーに出場することになるが、彼自身にとっての走ることは一体どのような意味があるのだろうか。それは更生のために仕方なく強制されているものでは決してない。物語の冒頭でスミスは早朝の練習の様子を次のように語る。

この世界に産み落とされる最初の間人だと自らに言い聞かせて、まだ鳥も鳴き出さないほどの早朝に、霜の張った草にぴょんと飛び出すとすぐに俺は考え始める。この考えることこそ俺が気に入っていることだ。俺は夢見心地でコースを走る。(11)

スミスは走るという行為とともに思考を始める。彼は走ることによって、それまでの監視や管理された現実とは切り離された感覚に陥る。身体を通じて身体性から切り離された状態を手にするのだ。それこそが彼なりの自由であると述べる。

ときどき考えるのは門を出て小道をとことこ走り、その道の突き当たりにある、あのつるんとして、ぼてっとした檜の木のとこで折り返してくる2時間くらいほど、いままでに自由だったことはないんだ。(11)

ボーストルに入所して以来、全英クロスカントリーの大会で優勝するように練習している間も、彼は見張られていることを認識しており、練習中に脱走することは不可能であると理解している。走ることによって得られるのは思考の自由であったことは間違いないことである。考えることまでも監視、管理することは不可能であると彼は考える。

やつらは一日中俺たちを監視できる。たとえばマスをかいてないかとか仕事をしっかりやっているかとか運動をよくやっているかとか。だけどさすがにX線を通して俺らが腹の中で何を考えてるかなんてわかりっこない。(10)

このように、彼はみずからの思考だけは、服従することもないように、ボーストルからの規律から自由であろうとする。彼にとって「走る」ことは自由な思考を手に入れる一種のスイッチのようなものであるが、さらに、もう一歩先まで認識を押し進めることに成功し、毎朝の練習コースでちょうど半分まで走ったところに浮かぶ考えは以下のようなものである。

深く考えることなんてことは馬鹿げてるんだ。考えたってどうなるわけでもないからだ。だけどこの半分のポイントをすぎたとき、おれは何か深遠な気持ちになる。なぜって早朝に長距離を走っていると、こんな風につねに走ることこそが人生だって気がするからだ。もちろん大した人生じゃないし、生きていれば当然出会うような不幸や幸福、あるいはそんな出来事であふれている人生なんだ。そして今思い返してみるとこうやってたくさん走った後で俺が思ったのは、一度人生が始まってしまえばどういう終わりを迎えるかなんて簡単にわかるってことだった。(19)

スミスが獲得したのは、走りながら考えることを繰り返すことによって「考える」ことが特別な行為ではなく当然のものとなり、その走ること自体が自分の人生のメタファーであるとの認識である。彼は自らの認識を掘り下げることが拒否したわけではなく、それが彼の当然の行為、日常的な行為へと変化したためにあらためて意識すべき行為ではなくなったということであると推測できるだろう。「走る」という身体的動作がある意味で非日常的な動作というよりも、走るという行為そのものが彼に安らぎの空間を提供するという一種倒錯した行為になっているのである。

以上のことから、次に我々が理解すべきなのは、ボーストルの教育的な影響力である。スミスはボーストルの管理や監視的な側面を強調し、そこから逃れることを最優先しようとしている。しかしながら、アイデンティティを確立しようとする成長物語とし

てのスミスを読むうちに改めて見えてくるのはポースタルでの教育と生活が彼に自己認識をもたらす契機になっていた可能性である。物語の冒頭で、ポースタルの院長にスミスは、「我々が欲しているのは、懸命で誠実な労働と、優れた運動選手なのだ」と説明され、さらに「きみがもしこの両方を我々に与えてくれるならば、君を正当に扱い、そして誠実な人間として君を社会に送り出すこと約束しよう」(10)と伝えられる。この院長の言葉の背後にあるのは、管理や強制と表裏一体となった教育と更生の物語である。その教育と更生の目的が前景化されるのは、物語の結末で出所したスミスが実は読書をして、その中に使われていた表現を自らの手記に取り入れていることが明らかになる瞬間である。

その間に (In the meantime) (出所以来読んだ何冊かの本の中でよく使われていた表現だが、その本はまったく役に立たなかった。というのもすべての本が決勝点 (a winning post) で終わっていて、何一つ教えてくれなかったからだ) おれはこの物語を友人の一人に渡し、もしまたパクられたりでもしたら、なんとかして本にでもしてくれと頼もうと思う。(54、英語表記は筆者による)

読者はここで初めてこの物語がスミスの手記であり、ポースタルに収監されていた過去を振り返っていたことに気付くことになるが、やはりここで注目したいのは、スミスが読書の習慣を身につけ、手記をつけていたということであろう。彼はポースタルに収監されていた間に「社会」にでて、「労働者」として生きていくための教育をされていたのだと推測することができる。となれば、その背景にあるのは、1950年代の福祉国家的なシステムの中で、不良少年たちを労働者として、社会にでて生活していくための機関としてポースタルの存在の重要性である。

その福祉国家的な制度に身を置きながら、スミスは院長からクロスカントリー大会を直前にしてある提案を受け、初めて自らの可能性に気付くことになる。院長は国会議員に向かってスミスが大会で優勝することは確実だと言い、さらに続けてポースタルを出た後に

プロランナーへの可能性を示唆する。その会話を偶然聞いてしまったスミスは走ることが富をもたらすものであることを初めて認識し、プロのランナーになれば、送るであろう豊かな生活を想像する。

ただおれは女房をもらい、車を買って、笑顔の長距離顔を新聞にのせてもらい、剃刀の刃を買って紅茶を飲もうと思ってスーパーに入ったら俺が誰なのかわかって近寄ってくるような女どもがくれる手紙の返事とをびきり美人な秘書をやとって書かせるだろうな。(39)

ここでスミスは院長が提示した豊かな未来への可能性に心惹かれる。それはクロスカントリー大会で優勝し、院長にトロフィーを差し出すと引き換えに得られる豊かさであるのだが、スミスにとってそれは自らの自由を差し出すこととほとんど同じ意味である。ここに19世紀から連綿と続く成長小説の系譜とは違うスミスの姿が描かれる。つまり、それまでの成長小説では主人公たちは困難を乗り越えた後、豊かさを手に入れ、そして階級も上昇する様子が描かれている。スミスはその後、彼は自分が優勝するだろうレースの様子を想像するのだが、その想像こそが彼に冷静さをもたらし、豊かな生活を手に入れることを彼に拒否させる。

おれは、自分が走り世界中のやつらを打ち負かしていると頭の中で想像した。みんなをすべて置き去りにし、最終的に広い荒野を一人で駆けてゆき、素晴らしいスピードで石や藪の間を駆け抜けていると、突然パン、パンという音で、人間よりも早く走る銃弾が、木の陰に隠れた警官のライフルから発射され、おれの完璧な走りっぷりも関係なく、この体を撃ち抜き、引き裂き、そしておれは倒れるのだった。(40)

ポースタルの院長の誘惑に負けることは、結局スミスにとって自分の身を犠牲にし、彼の唯一残された自由さえも取り上げられてしまう可能性を彼は想像している。つまり彼の肉体を使った労働の対価として幸福そうに見える富を手にするために、彼が考えるのは文

字通り自らの肉体を捧げる必要があるということである。彼にとって「走る」という動作は自らのアイデンティティを確立するための一つの手段であり、さらには決して名誉や富などとは交換可能なものではなく、仮に交換したときには、彼の存在さえ危うくしてしまう可能性があるということである。

4.

ここで改めて考えてみたいのは、シリトーのデビュー作である『土曜の夜と日曜の朝 (Saturday Night and Sunday Morning)』(1958)における主人公アーサーの怒りの対象と同じく、スミスは彼のランニングを通じて誰に対して抵抗しようとしているかという問題である。河野の指摘によれば、『土曜の夜と日曜の朝』のアーサーの怒りは、イギリス労働者階級の伝統である中産階級に対する怒りではなく、「福祉国家の全体的な状況」に向けられたものであるということだ。⁶ スミスの抵抗もまた、それに近いものがあるといえよう。彼は自らを抑圧する存在としてのボーストル、特にその院長に対して、レースを通じて、一泡ふかせようと行動する。そして、結末部分でみずからの「手記」を出版し、さらなる抵抗を計画する。しかし、これまでの走ることを通じた身体性による抵抗ではなく、この将来の計画された抵抗は社会へでるための教育機関で経験し、獲得したリテラシーが基盤となっているのである。スミスの抵抗は、その身体性を通じてのそれよりも、ある意味で成長しており、教育を通じて得られたそのリテラシーを行使しながら、皮肉な形で福祉国家への抵抗を継続しようと試みる。

ただ、彼の走ることに関する語りと、過去を振り返る場面の関係性も重要である。院長による提案を受けることは自らの命を引換にすることだと想像したのち、実際レースが始まってからのスミスはそれまでの「走りながら考える」という行為をやめ、まるで自動で作動する機械であるかのように描かれる。

おれは規則正しいジョグのリズムで走った。そのうちそのリズムはなめらかになり、走っていることも忘れてしまい、足が上がっているのか下がっているのか、腕が前にいっているのか

後ろにいっているのか、もうわからなくなっていた。肺も動いていないようだったし、心臓なんかいつも走り始めのときに感じるいやな鼓動が止まっていた。(42)

このスムーズに動く機械のような比喩は、レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) が『キーワード辞典』の中で *mechanical* という語の中で説明しているような、16世紀以降に使われるようになった労働者の意味を喚起させる (341-4)。思考と身体的動作がある意味で分離していた普段のスミスのランニングではなく、自らの身体と思考がある連続性を持って、有機的に機能しているように描かれる。しかしその後、彼は突然強烈な孤独感に襲われる。そしてそれが一体どのような種類の孤独感なのかを彼は自ら分析する。

おれにも長距離走者の孤独ってやつがどんなもんかわかってきた。俺の場合、この孤独感こそが世の中で唯一の誠実さ (the only honesty) であり現実なんだ。(43)

彼にとって誠実であるということは自分のアイデンティティを確立し、さらに院長やボーストルでの経験が提供してくれたであろう労働と豊かな未来を拒否し、自らの決断こそが将来を切り開いてゆく可能性を秘めたものだった。その誠実さによって、彼は先頭を走っていたレースを自ら負けることを選択するのだ。換言すれば、自らがいかに「誠実」であるかをレースにおいて彼は証明しようとする。レースの優勝を放棄するのはボーストルの教育制度や管理体制、あるいは自分と価値観の全く違う院長に対する単なる復讐という意味においてだけではなく、自らの存在を主体的に確立させるための決断だったとも考えることができよう。なかなか次のランナーが来ない状況で彼は応援の圧力に屈しゴールしてしまいたいという誘惑に駆られるが、優勝をゆずるといふその決断を後押ししたのが、がんで死んだ父親の最期の記憶である。⁷

おれはまだ、おれのおやじのような無法者の

死 (the Out-law death) のことを考えている。医者たちが病院へつれて行こうとするととんとと出てけとどなりつけた (まるで血だらけのモルモットみたいに、キーキーわめいたおやじのことを)。今になって初めておれにはわかるのだ。おやじがどんなに太い肝っ玉を持っていたかが。あの朝おれが部屋へ行ってみると親父は着ているものをはだけ、皮をむかれたウサギみたいな格好で倒れていた。白髪頭をやっとベッドの端にのせ、床の上にはおそらく体中にあっただけの血液が全部流れ出たのだろう。つま先から上まで全部血まみれだった。リノリウムの床とカーペットがほとんど血でおおわれ、薄くピンク色をしていた。(50)

この引用はスミスが部屋に入っていくと血を吐いて倒れている父親の死体を発見する場面であるが、父親の壮絶な死体を目撃したことを思い出した後で、彼は父親の不幸な人生に思いを巡らす。その回想が彼にもたらしたのは子供のころ以来の涙である。強烈な記憶がもたらした彼の涙によって彼はあらためて決意を固め、自らと同じく「法の外の」人間であり、彼の理想とする誠実さをもった父の復讐さえも実行しようと決意する。そして彼のいう誠実さを貫き、レースに自ら負けた結果、スミスは当然ボーストルの中で重労働を強いられることになる。しかし、レースに負けたにもかかわらず、自らの意志を貫いた彼にはある種の満足感さえ感じられる。

その仕事はたいしたことがなかった。もし何か言えるとすれば多くの点で頑丈になったということだ。出所したとき、院長はいじめてやろうとおもっていたのに何にもならなかったとやっと気付いた。というのもボーストルを出るとき、やつらはおれを軍隊にいれようとした。だけど検査に通らなかったんだ。わけを教えてやろう。あの最後のレースと6カ月間の労働のあと、出所するとすぐ胸を悪くしたんだ。要するにそれは院長のレースには負けたが、俺のレースでは2度勝ったってことさ。(52)

この部分を読むとスミスが自らの行為に満足しているように思える。誰にも知られずに自らの「走る」のをやめること、つまりレースに負けることで勝利するという矛盾したレースを実行し、自らの中だけで完結させている。それは彼にとって皮肉にもボーストルの教育と密接に関連した、もっとも重要なキーワードである誠実さに従った個人主義的な行動の結果なのであり、その誠実さを貫き通すためにはその孤独感との決別は不可能であり、彼にとっての誠実さを示し続けるために再び盗みを行う以外の選択肢はなかったと言えるだろう。孤独感が彼のいう誠実さと結びついているのであれば、その孤独感は当然のように解消されないままだが、彼はボーストルでの更生の時間を否定するかのようにふたたび盗みを働くことになる。それは彼にとっての誠実さゆえの抵抗であったと考えることもできるだろう。

5.

この作品の中でスミスは走るという動作を通じて考えるという行為を身につけることになる。それは彼がボーストルに入所することにより得られるものの中の一つであり、それはボーストルの教育の結果だったと考えられる。更生し、教育するというボーストルのそもそもの役目は皮肉にもスミスの思考を促し、それにより服従ではなく反抗を導いたともいえよう。当然、個人の思考はボーストルの院長であっても当然犯すことのできない領域である。ボーストルの設立目的である、自律した社会人へと更生させるという目標をある意味でスミスは達成し、彼が自ら選択した行動、つまりレースを放棄することで、個人主義的なモメントを達成したと考えることができる。ただしその主体性を手に入れる際に代償となったのは、彼の孤独感であり、換言すれば、彼は集団主義とは距離をとる個人主義を自ら選択する。⁸ 彼が孤独を宣言するとき、われわれはそこにある種のロマンティックな英雄像を欲望する。しかし彼が「おれはどんなにつらくとも自分ひとりで草原を駆けてゆく長距離走者なんだ」(52)と述べるとき、そこに描かれるのはあくまでも福祉国家的な制度の中で教育を受けてきたスミスの姿であり、その結果、抵抗の挫折の可能性をもわれわれは読み取らなくて

はならないのかもしれない。

¹ 本稿は、新英米文学会2010年12月例会（於早稲田奉仕園、2010年12月18日）における研究発表原稿に加筆・修正を加えたものである。

² Richard Bradford, "Alan Sillitoe Obituary."

³ 井野瀬久美恵、「帝国の逆襲——ともに生きるために——」、260-2。

⁴ 市橋秀夫、「ニュー・カルチャーの誕生？——1960年代文化の再考——」、279-80。

⁵ ジョン・ブリッグス、『社会と犯罪』、317。

⁶ 河野真太郎、「おれたちと私たちはいかにして貧しさを失ったのか？——「世代問題」と文化と社会の分離」、156。

⁷ この場面に関して、Kalliney はスミスの独白のクライマックスはレースのゴールを切る場面ではなく、この父親の死を回想する場面こそがクライマックスであると述べ、この一連の回想こそが彼がレースに勝利することを拒否する原因となっており、父の記憶に誠実 (loyal) であるためにスミスはレースに負けたのだとして、この回想の重要性を説明している。(184)

⁸ スミスの個人主義 (individualism) の問題に関しては、Hitchcock が次のように述べている。

"Although his battle is often intensively private, especially with the warden of the institution, the staging of this political position is overdetermined by a collective subjectivity which Smith speaks as 'us.' In any event, the triumph of his own battle, in deliberately losing the cross-country race, is a deferred victory in the individual and collective sense, for Smith knows, as we should, that coming to political consciousness is not in itself the act of overcoming 'them,' but a prelude to such an act. This realization defines Smith's loneliness" (102).

引用参考文献

Bradford, Richard. "Alan Sillitoe Obituary." *The Guardian*. N.p., 25 Apr. 2010. Web. 6 Jan. 2015. <<http://www.theguardian.com/books/2010/apr/25/alan-sillitoe-obituary?intcmp=239>>.

Hanson, Gillian Mary. *Understanding Alan Sillitoe*. Columbia, SC: U of South Carolina, 1999. Print.

Head, Dominic. *The Cambridge Introduction to Modern British Fiction: 1950-2000*. Cambridge: Cambridge U, 2002. Print.

Hitchcock, Peter. *Working-class Fiction in Theory and Practice: A Reading of Alan Sillitoe*. Ann Arbor, MI: UMI Research, 1989. Print.

Kalliney, Peter J. *Cities of Affluence and Anger: A Literary Geography of Modern Englishness*. Charlottesville: U of Virginia, 2007. Print.

Sawkins, John. *The Long Apprenticeship: Alienation in the Early Work of Alan Sillitoe*. Oxford: Peter Lang, 2001. Print.

Sillitoe, Alan. *The Loneliness of the Long-distance Runner*. New York: Vintage, 2010. Print.
 (『長距離走者の孤独』丸谷オ一／河野一郎訳、新潮社、1973年。)

Sinfield, Alan. *Literature, Politics and Culture in Postwar Britain*. London: Continuum, 2004. Print.
 市橋秀夫「ニュー・カルチャーの誕生——1960年代文化の再考——」『イギリス文化史』井野瀬久美恵編、昭和堂、2010年、275-91。

井野瀬久美恵「帝国の逆襲——ともに生きるために——」『イギリス文化史』井野瀬久美恵編、昭和堂、2010年、250-74。

ウィリアムズ、レイモンド『完訳キーワード辞典』平凡社、2011年。

河野真太郎「おれたちと私たちはいかにして貧しさを失ったのか？——「世代問題」と文化と社会の分離」『言語社会』第7号、2013年、151-64。

シリトー、アラン「スポーツとナショナリズム」『私はどのようにして作家となったか』集英社、1978年。

ブリッグス、ジョン『社会と犯罪 英国の場合——中世から現代まで』松柏社、2003年。